



TITLE:

感想7(東京夏の学校に参加して)

AUTHOR(S):

三輪, 浩

---

CITATION:

三輪, 浩. 感想7(東京夏の学校に参加して). 物性研究 1966, 5(5): 361-363

ISSUE DATE:

1966-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85848>

RIGHT:

を養えるというのが、最大の効果だつたかも知れません。例えば Kohn さんの話された inhomogeneous field の中での interacting electron gasなどは正しく原子、分子そのものであり、Brueckner さんの話された He の結晶での核の運動の correlation の扱い方も電子の correlation の取扱いに直接応用できそうです。電子の海の中で相互作用する二つの電子間の力が Coulomb の法則よりどの位弱められるかを、電子密度の関数として知ることができれば、原子・分子の性質の計算に非常に役に立つということもあります。

原子・分子ということを離れれば、やはり超伝導の理論の現状を知ることができたのは幸いで、その成功ぶりは大変印象的でした。

この種の international meeting は日本で始めてということで、準備に当てられた関係者の御努力は大変なものだつたと思われます。参加者の一人として厚く御礼を申し上げます。

運営に関する問題点と云えば、やはり会議か学校かという矛盾した二つの性格をどう調和させるかということで、これは来年度以降の似た計画にも大問題の一つとして残ることでしょう。今年の meeting でも school としての性格があつたからこそ私なども参加させていただいたので、その点すこぶるユニークであり、新聞などで「二つの国際会議」として京都 Conference とならべて取上げているのは見当違いだと思います。もつともこの種の国際交流の少い我国で、全く school として徹するのは困難でしょう。その点をどう調整すべきかは各人各様の意見があると思いますが、此の種の試みは今後色々な形で段々と盛んになつていつて是非ほしいものであり、数多くなれば school の性格の濃いものがあつて良いのではないかというのが私の感想です。

## 感 想 7

### 三 輪 浩 (阪大理)

今度の summer institute の「前半の部」に参加した人のかなりの割合の人がそうであつた様に、私も conference ではなくて学校なればこそと考えて応募し、幸い出席を許された。いわば多体問題にとつては門外漢の一人であり、しかもこの計画を知つたのは例の財源や運営主体などについての論議がす

## 東京夏の学校の感想

でに相当進んでいた頃でもあつたので、色々なお膳立ての様子には詳しくないが、準備段階での福田先生、久保先生ほか多数の方々のご苦勞は想像に難くない。日本で初めての試みが盛況のうちに終つたことに対してそれらの方々の御努力に敬意を表するとともに、今後この様な institute が開かれるとして、特に強く感じた二、三の点について一生徒の注文を述べることにしたい。

講師の顔触れはまことに豪華版で、どの義もよく準備された立派なものだつたのにかかわらず物足りなさを感じたのは二、三回という限られた時間で、初心者にはなかなかついていけない話のあつた反面、専門家にはわかり切つた話にほとんどの時間を費してしまつた場合もあつたことと思う。全体としては、私がプログラムを受取つてから期待していた程度のもの、すなわち、summer institute と聞いて生徒気分を出かけていく者にとつてはやや程度の高い内容であつた。四日半という制限を考えれば講義の種類はもつと少なくすべきで、今回はいかにも総花的に思えた。その場合でも、誰々の本の何頁から何頁までを読んでおく事等の形で適当な予習を期待することで、講義時間をもう少し有効に使える準備の方法があつたかも知れない。

講義と informal session との性格は、極く常識的には、それぞれ素人向きと専門家向きということになるであろうが、実際の出席者からは全員向きと勤勉家向きという様な結果に見受けられた。後者は飛入りの話がかなりの部分を占めた事情もあつたものの、一つの session で話題が多方面に亘つたり、プログラムがその日になつて変更されたこともあり、悪い意味でも informal だつた。

その他、運営上のこまかい点では、集りの前に配られた circular なども含めて、基研・物性研の研究会のにおいが強かつたのは、準備の中心になられた先生方がお忙しがつたせいと思うが、是非の問題はともかく、私の期待とは違つたもので、例えば百人からのしかもお互いに顔なじみでない人の多いグループに対する information の伝え方は、二、三十人の場合とは別の工夫が必要だつたろう。特に将来外国からの参加者も増えると思われるからより大切なことになる。

アカデミーハウスでの生活面ではかなり不満を感じたし、そのような声も聞かれたが、止むを得ない事情もあつたろうし、多くはアカデミーハウス自体の問題であるから一つだけ取出すことにすれば、あの程度の宿泊設備と食事ではもつと適当な（費用と場所）所がなかつただろうか。国内の参加者のほとんどが研究旅

費や科研費からやりくりして参加することを考えれば、また今後期間が長くなる様なことになれば無視できない問題である。

今回二つのほとんど独立な institute が第一週、第二週として開かれたことは、京都会議と絡んで新聞に取上げられたことも関連してあまり愉快でない印象が残った。京都と大磯との集りがそれぞれ特徴ある性格を持ち、よい interaction が得られたと考える精神を生かせば、この二つも別々の行事でも構わなかつたわけで、その場合に増える主として事務上の雑用がそう多くなければ独立な企画とした方が、動機だけでなく、結果にもある程度の責任を持った準備運営ができるのではないだろうか。

これからも夏の学校は機会があれば出席したいが、収容人員が限られる様な場合には、会の趣旨などを考慮した上で遠慮する心構えも必要であろう。自分が申込むことは、多分、年下の応募者を一人押しのけることになるであろうから。

## 感 想 8

西 川 恭 治 (京大理)

渡 部 三 雄 (東北大理)

今回の Institute の主な目的は日本と外国の第一線研究者の間の直接的学問的交流にあつたと思う。その意味で、今回の Institute は大変有効であつたと思うし、その組織運営に当られた方々の御努力、御苦勞には深く感謝している。そして今後ともこの種の研究会がいろいろな形で行なわれる事を望み、そのために、我々もできうる限りのお手伝いをさせていただきたいと願っている。

こう書くと、我々が反省会の席上でのべた若手批判的な意見を思い出される方があると思う。我々はあの席上での我々の態度が甚だ不適當で、そのために多くの苦言を招いた事を後悔している。しかし同時に、我々は、我々の発言内容が必ずしも見当違いではなかつたと思うので、改めてここにそれをくり返したいと思う。

第一に、我々は参加者の構成をもつと若い人本位にする事ができるのではないかと思う。元来、多額の労力を払つてこの様な Institute を持つた理